Literature Review Regarding the Current Situation and Support for Mothers Raising Children: Focusing on Negative Emotions Towards Childcare and Social Support
2023 Vol.25 p.93 - p.102

育児中の母親の現状と支援に関する文献検討

―育児への否定的感情とソーシャル・サポートに焦点を当てて―

髙橋　あゆみ　お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科
山田　美穂　お茶の水女子大学 基幹研究院/コンピテンシー育成開発研究所

要約

現代は少子化や核家族化，働き方をめぐる問題などがあるため，子育て世代にとって恵まれた環境であるとは言い難い。母親は子育ての中心的役割を担うが，このような環境での子育ては否定的な感情が生じやすくなることが推察される。そこで本稿は育児への否定的感情について，それぞれの特徴と発生要因について概観し，子育て中の母親へのソーシャル・サポートについて誰からのどのようなサポートが効果的なのか検討した。その結果，子育て中の母親へのソーシャル・サポートにおいて，実母の存在の大きさは日本特有であることやソーシャル・サポートは母親の特性や支援のニーズなどからも効果が異なることが示唆された。今後は情緒的サポートの中の言葉かけに焦点を当て，母親の内的体験と家族の関係性の変化について検討することが求められる。

キー・ワード：子育て環境，育児への否定的感情，孤立感，ソーシャル・サポート

Ⅰ　はじめに

児童相談所における児童虐待相談対応件数は令和３年度で207,659件であり（厚生労働省, 2022a），年々過去最多件数を更新し続けている。児童虐待の加害者として最も多いのは 46.9%と実母である（厚生労働省，2018a）。母親が加害者として児童虐待を起こしてしまう背景として，厚生労働省（2022）が行った死亡事例等の検証結果では，虐待加害者となった養育者（実母）の心理的・精神的状態について「養育能力の低さ」とともに「育児不安」が 30.6%と最も多く報告された。先行研究においても，育児不安と虐待との間に関連があることが示唆されている（田口他，2014）。また，母親の孤立感も虐待との関連が示唆されている（寶川，2015）。

このような子育て中の母親の育児不安や孤立感の背景にはどのようなものがあるのだろうか。その一つに家族構造や就業構造といった社会システムの変遷と関連があると考えられる（笹川, 2014）。その中でも少子化や核家族化，地域とのつながりの希薄化，親の労働環境やインターネット社会が子育て環境に大きな影響を与えているのではないだろうか。

1.　社会構造の影響による子育て環境の変遷

少子化は 2016 年に統計開始後初めて出生数が 100 万人を割り（内閣府，2022），それ以降も現在に至るまで緩やかな減少傾向が続いている。その要因として, 女性の社会進出や結婚観の変化, 親への依存期間の長期化などが挙げられる（内閣府, 2004）。このような少子化によって，兄弟姉妹や親戚などを含め，周りに子どもがいる機会は少なく

なり，子育て経験や知識の伝承が難しくなることが指摘されている（文部科学省，2000）。

核家族化の現状としては，児童がいる世帯において 76.2%が「夫婦と未婚の子のみの世帯」で，12.9%が「三世代世帯」であった（厚生労働省，2022b）。核家族世帯（夫婦のみ世代，夫婦と子世帯，ひとり親と子世帯）の占める割合は増加しており，今後も増加することが見込まれている。核家族化の進行はかつて家族や近隣から得られていた子育ての知恵や支援を得ることを阻害すると考えられている（内閣府，2006）。

また，都市化については多様な社会背景を有する人々の集合体であるため，共通の社会規範を持ち難く，また職と住の分離や転勤などの要因により，社会関係の維持が難しく，地域とのつながりが希薄化しているが，これにより都市部における未就学児を持つ母親の孤立リスクが高くなることも危惧されている（遠山，2016）。

2.　人々の生活を取り巻く子育ての問題

働き方をめぐる問題についても子育て環境に直接的な影響を与えるものが多い。日本では夫の家事や育児にかける時間は 1 時間 23 分と以前よりも増加しているものの，他国と比べて依然として非常に短い（内閣府男女共同参画局，2020）。その要因の一つに育児期にあたる 30，40 歳代の男性の労働時間が長いことが挙げられる。特に育児参加に負の影響を与えている週労働時間 60 時間以上の男性についても，育児期が最も多くなっている（内閣府，2004）。しかし，実際には約 8 割の男性が家事育児・プライベートを仕事と両立させたいと考えており（内閣府，2007），希望と現実に大きな乖離がみられる。

女性についても，第一子妊娠後 46.9%が退職する。出産前後で仕事を辞める理由としては，「子育てをしながら仕事を続けるのは大変だったから」（52.3%），「職場の出産・子育ての支援制度が不十分だったから」（27.9%）と育児と仕事の両立環境が整わなかったことを理由に挙げている人も一定数存在する（内閣府，2018）。このことから，男性と同様，家事育児と就業の両立は母親本人が望んだとしても，環境により叶わないことがあることが考えられる。

以上のように男性の労働時間が長く，女性が終日家で子育てに専念する構造は女性の社会進出が進んだ今もなお残っている。今まで所属していた社会から離脱し，家に子どもと自分だけ，自分の時間が持てない，といった環境下では母親の孤立や育児ストレスが生じやすくなると考えられる。特に専業主婦の場合，「立派な子育てをしなければならない」という役割意識が強くなり，育児不安を抱きやすいと考えられている（上野他，2010）。

その他，インターネットに幼い頃から親しんでいたデジタルネイティブである現代の子育て世代の親たちは先輩夫婦に子育ての相談や質問ができるサイトや妊娠・子育てに関する情報がまとめられたアプリを利用するなど，インターネットを利用することですぐに役に立つ情報を手に入れられる。しかし一方で，育児情報の多様化とともに情報量が飛躍的に多くなり，情報選択の困難や，情報の安全性や信頼性の問題も生じるようになった（太田，2014）。また，情報をたくさん得ているほど育児不安が高いことが示唆され（荒牧・無藤，2008），現代の親世代は育児に関する情報に振り回されやすいことが考えられる。

また，21 世紀の子育て世代は物質的に豊かで快適な社会環境の中で育ち，合理主義や競争主義などの価値観の中で育った者が多く，必ずしも効率的でも楽でもなく，自らが努力してもなかなか思うようにはならないことが多い子育ては，困難な体験であり，その喜びや生きがいを感じる前に，ストレスばかり感じてしまいがちである，という指摘もある（文部科学省，2004）。2020 年代の現在においても，子育て世代にとって日常で少しでも合理的に過ごせるように日々家電が進化していたり，子育てに役立つ便利グッズが発明されたり

と，物質的には満たされ，暮らしが便利かつ豊かになったかもしれない。さらに情報にも簡単にアクセスできるため，子育てについての情報収集やイメージもしやすいと考えられる。しかしそれでも現代の子育て中の親がポジティブな思いだけでは過ごせないのは，子育てが物や情報に頼ることや自分の努力だけでは解決できず，思い通りにならないことが多い困難な体験であることは現在も変わっていないからではないだろうか。

3. 本稿の目的

以上のように，現代の環境は子育て世代の親にとって恵まれた環境であるとは言い難い。近年では父親の育児参加が見直され，男性の家事育児にかける時間が増加していたり，父親の育児休業取得が促進されていたりするものの，それでもなお育児の中心的役割を担う母親にとって，現代の子育て環境は否定的な感情が生じやすいと考えられる。

そこで，本稿では育児に対する否定的感情についてその概念を整理するとともに，母親へのソーシャル・サポートについてその機能や提供者によって効果は異なるのか，母親にとって効果的なサポートとはどのようなものを指すのか，検討することを目的とする。

Ⅱ　育児への否定的感情とその要因

育児への否定的感情は育児不安や育児ストレスなどが挙げられるが，その名称や定義は統一されていないことが多い（荒牧・無藤，2008）。その一方で，それぞれの否定的感情がどのように生起するのか，その発生要因について検討している先行研究はいくつも見られた。本稿では母親が抱く子育てへの否定的感情について検討されていることが多い，「育児負担感」「育児不安」「育児困難感」「育児ストレス」について取り上げるとともに，これらとともに問題に取り上げられやすい「子育て中の孤立感」について，先行研究で述べられている要因や特徴について概観する。

育児負担感について，荒牧・無藤（2008）は，負担感は母親自身がどれだけ育児に拘束されているか，周囲からのサポートをどれくらい得られているかによって負担感に差が生じるとした。また，岩渕他（2009）は周囲のサポート不足や育児知識と技術の不足による母親の社会的活動の制限と子どもの特性から生じる児に対する否定的感情が関連あるとし，夫や家族の育児参加や子育てについて学べたり相談できたりする機会の提供が求められるとした。このように育児負担感については，夫や家族など周囲からのサポートが十分に得られないことで，母親として育児の役割から離れられずに自分自身の時間が確保できないことや子どもに対して育てにくさを感じていることが育児負担感に繋がると考えられる。

育児不安について渡辺・石井（2005）は，育児不安に影響を及ぼす要因として，「育児ストレッサー」「育児ソーシャルサポート」「母親の育児観」「セルフエフィカシー」が影響を及ぼしていることを見出し，中でも育児ストレッサーが育児不安に最も影響を及ぼしていると指摘した。このことは，子どもの行動にどう対応して良いかわからないことが不安や自信の喪失に結びつくのではないかと渡辺らは述べている。荒牧・無藤（2008）は，育児不安について特定の行動や行為に対して，というよりも全体的な文脈の中で喚起されるものであることを示唆した。他の先行研究では，母親が抱える育児不安について，「育児の自信のなさ」と子どもに対する否定的感情である「否定的子ども感」が因子として見出された（河野，2011）。さらに「育児の自信のなさ」は「子どもの育てにくさ」や「母親の認知様式」と関連があり，「否定的子ども感」は「母親の認知様式」と関連があることが示された。これらのことから育児不安については日常の中で育児に関して起こった出来事にうまく対処できずに日々自信を失っていくことで募っていく現象なのではないかと考えられる。

育児困難感について井田（2013）は子どもという新しい家族の存在により今までの生活様式の変更が余儀なくされ，現実との相違や思い通りにいかないことから自信のなさが助長され，その結果，不安・抑うつ傾向となり，育児困難感が高まると指摘した。また，竹口・新田（2019）は働く女性に対して調査を行い，「子どもにかける時間の不十分さ」「労働時間の裁量のなさ」が育児困難感の要因として抽出されたことを示し，時間や仕事量といった物理的なものの調整が必要不可欠であると指摘した。これらの先行研究から，私生活や就業について思い描いていたものとのギャップや今まで通りにいかないことによる不安の高まりが育児困難感へ繋がっていくと考えられる。

育児ストレスについて，佐藤他（1994）は「子どもや育児に関する出来事や状況などが，母親にとって脅威であると知覚されることやその結果母親が経験する困難な状態」と定義した。また，野澤（2012）は，育児ストレスは育児不安や育児負担感，育児困惑感が下位構造に存在すると述べた。このことから育児ストレスは育児に関するネガティブな思いを包括的に表したものであると考えられる。

孤立感について，榊（2010）は「横並び・人並みの生活様式が求められる現代×親子関係の不可避性といった子育ての特殊性×子育ての規範意識を背景とした親の自信のなさ」が母親の孤立感を生じさせ，また深めていくものであるとし，島田（2019）は孤立感が前提に負担や不安を増大し，子育てに対する否定的な感情を抱くと説明している。

Ⅲ　子育て中の母親へのソーシャル・サポート

1. ソーシャル・サポートの分類

ソーシャル・サポートについてはいくつもの研究が存在し，定義についてコンセンサスを得ているものはないが（稲葉他，1987），House & Robert（1985）はサポートの内容に着目し「手段的サポート（直接的な行為を伴ったもの）」「情緒的サポート（人と人との情緒的な結びつき）」「情報的サポート（情報提供）」「評価的サポート（考えや行為を認めること）」の 4 つに分類した。

子育て中の母親へのソーシャル・サポートについては，山田他（2005）は「情緒的サポート（心理面での援助）」「物理的サポート（実際面での援助）」「情報的サポート（情報面での援助）」「経験的サポート（同じ立場や経験を持つ人からのアドバイスや指示）」へ分類を行い，吉永（2007）は「コンパニオンシップ（おしゃべりなど何気ないやりとり）」「情報的サポート（役立つ情報の提供）」「情緒的サポート（精神的，感情的なサポート）」「物質的サポート（物質的なサポート）」に分類した。

このように名称や記述される内容はそれぞれ少しずつ異なるものの，子育て中の母親に対するソーシャル・サポートとは，母親の苦労や頑張りを理解し，心理面に寄り添う情緒的サポート，家事育児への参加や金銭的援助による手段的・物質的サポート，子育てに関して有益な情報を提供する情報的サポートなどが挙げられる。

2. ソーシャル・サポート源

サポートの種類により，母親が期待するサポート源（サポートを頼ることができる人）が異なることが示唆されている（吉永，2007）。手段的サポートの提供者は実母や夫が多く，今後希望する手段的サポートの提供者についても夫が最も多く，次いで実母が多い（荒木他，2001）。このことは子育て中の母親にとって，夫や実母は気軽に甘えられ，サポートを頼める存在であることが考えられる。また，夫に今後も手段的サポートを期待することは，家族という共同体の中で母親が夫と力を合わせて子育てをしていきたいと考えている可能性がある。実際に夫の手段的サポートが多いと母親が認識しているほど，家事・育児負担感は低くなることが示唆されている（武田，2019）。

情緒的サポートについては，とりわけ育児不安

の緩和に重要な役割を担うとされており，情緒的サポートがないと育児困難感を抱きやすい可能性も示唆されている（山﨑，2018）。中には「夫のサポートは手段的なものよりも情緒的なものの方が家事・育児負担感をやわらげる効果を持つ」（武田，2019），「子育て中の母親の育児不安には精神的支えが最も重要」（伊吹他，2004）といった指摘もある。森下（2019）は，保育士など子育て支援に関わる保育者からの情緒的サポートがあると感じている母親は育児肯定感が高い傾向にあり，情緒的サポートを受けていると感じていないほど育児負担感が高い傾向にあることを示した。その一方で，山﨑他（2018）は子育ての相談相手として，夫や実父母を選んだ母親は育児不安が低く，保育士幼稚園教諭やインターネットを相談相手として選んだ母親は育児不安が高いことを示した。これらのことから家族に限らず子育てに関わる周囲の人の精神的なサポートが求められているものの，やはりその中でも身近な存在である夫や実父母からの情緒的サポートが母親の育児への否定的感情を和らげることによりポジティブな影響を及ぼしていることが考えられる。

また情報的サポートについて，子育て中の母親は実父母からの情報的サポートを期待している（八重樫他，2003；山田他，2005）とともに保育士や医療関係者にもサポートを期待しているが，夫には期待していないことが示された（吉永，2007）。このことは，子育て中の母親は実際に子育てを経験した実父母の経験談を自身の子育てに生かしたい，という思いや保育士や医療関係者の専門家としての知識や情報を期待している一方で，自分よりも子育てを行う時間が短い夫からの育児についての情報は心許ないという考えから生じるものなのかもしれない。

以上のことから，それぞれのソーシャル・サポートはサポート源によって，母親が求める先は異なり，その中でも自分の苦労や頑張りを認めてほしいと考えているのは身近な存在である夫や実父母であると考えられる。情緒的サポートとともに手段的サポートを夫や実父母に求めるのは育児への時間的，労力的コストが大きく，最も身近な家族にお願いしやすいためであると考えられるが，その根底には夫や実父母が気軽に頼らせてくれる，甘えさせてくれる，一緒に子どもを育ててくれる，といった母親の情緒的ニーズがあると考えられる。その一方で，子育てに関する情報については専門家から正しい情報を入手したい，また子育てをどう乗り越えてきたのか知りたい，ということで前者は保育者や医療関係者，後者は実父母にサポートを求めることが多いのではないかと考えられる。

3.　ソーシャル・サポートの海外事情と日本の特徴

日本と海外では子育てにおける慣習や支援体制が異なることもあり，日本のソーシャル・サポートには特有性があることが考えられる。特に欧米では「子育ては夫婦でするもの」という認識があり，夫の育休取得率は日本と比較しても高い（UNICEF，2021）。また，父親にしか取得できない育児休暇制度である「パパ・クオータ」が北欧中心に広がっており，子育ては母親と父親が一緒に行う，という考えが浸透している。さらに夫とともに中心的なサポート源は行政や民間企業の産後ケア事業である国も多い。例えば，フィンランドでは「ネウボラ」と呼ばれる保健師や助産師が母親の妊娠期から子どもの小学校入学まで定期的な面談や子育て支援を行い，ほとんどの母親がこの支援制度を利用する。また，ドイツやオーストラリアでも助産師が定期的に産後の母親の自宅訪問を行い，子育て指導や産後の母親のメンタルケアを行う。情緒的サポートについても，フィンランドであればネウボラが家族全体の精神的なサポートを行なったり，必要があれば専門家に繋いでくれたり，市によっては臨床心理士によるサービスが無料で受けられる制度が利用されている。オーストラリアでは「PANDA」と呼ばれる周産期

不安障害や産後うつなど産後に困難を抱えた人に向けた無料の電話カウンセリングサービスが一般的である。

一方で，産前産後の里帰りは日本独特の慣習である（小林，2010）。現代においても約半数の母親が出産にあたり里帰りをしており，育児の相談相手としても日本は夫に次いで実母が多い（厚生労働省，2018b）。日本のソーシャル・サポートにおける特徴は，海外のように相談機関や専門家へ繋がることが少なく，家族については夫だけではなく，実母をはじめとした原家族も力を合わせて育児を行う点であると考えられる。このことから，日本におけるソーシャル・サポートについて考える際は，夫だけでなく，実母がどのような役割を果たし，実母の存在が子育て中の母親にどのような影響を与えるのかを検討する必要があると考えられる。

4.　ソーシャル・サポートの様々な側面

手厚いソーシャル・サポートのすべてが子育て中の母親にポジティブな効果をもたらすわけではなく，「送り手が援助を意図したにも関わらず受け手が好意的に受け取らない場合」「送り手の援助が役に立たない場合」についても検討が重ねられている（菊池，2003；稲葉，2007）。菊池（2003）は，ソーシャル・サポートがネガティブな意味を持つ要因として，「援助者に関連する要因（援助者の態度，援助者の立場・状況・援助者の理解）」「援助内容（実行不可能なアドヴァイス，援助者にもわかりきったアドヴァイス，プレッシャーとなるサポート，実行不可能なアドヴァイス）」「被援助者に関連する態度（援助者の心理状態，援助者の性格傾向）」「援助者と被援助者の関係性（被援助者と身近ではない援助者からのサポート，被援助者と親密ではない援助者からのサポート）」を挙げた。子育てについても，草野他（2013）は，近所付き合いの程度が子育てのしやすさにどう影響しているかを検討し，「ほどよい関係性」の中での支援が最も効果的である可能性を示唆している。家族においても，八重樫他（2003）は，実父母とは適度な距離を保ちながら，適度な交流をとる方が育児不安やストレスを蓄積されることが少なくなるのではないかと指摘する。

また，サポートを受ける側の特性によってもサポートの効果は異なるとされており，塚本（2021）は，母親の愛着スタイルによってソーシャル・サポートの緩和効果が異なり，安定型はソーシャル・サポートによって育児ストレスを低減させることができるが，回避型においては支援者の存在が逆に育児ストレスを高める，という結果を報告した。

以上のことから，ソーシャル・サポートはその量が多いことによって母親への支援の効果が高まる，というわけではなく，母親の求めているサポートや人間関係における距離，母親自身の特性を考慮して行われるべきであると考えられる。

Ⅳ　考察

本稿では現代の育児環境について概観し，子育て中の母親が陥りやすい子育てへの否定的感情についてそれぞれが生じる要因や特徴について検討した。その結果，子育てへの否定的感情は様々な概念や定義があるものの，その多くが周囲のサポートの得られなさや子育てに関しての自信のなさ，思い通りにいかないことの難しさが要因となって生じることが示唆された。ソーシャル・サポートについては，その種類や誰からの支援が効果的か，検討を行い，さらに，サポートにおける日本の特有性やネガティブな部分があることが推察された。

1.　子育て中の母親への支援の重要性

育児への否定的感情の要因については，現代の社会構造や生活環境がその生起に大きく関わっていることが推察される。例えば，現代の母親の育児負担感は核家族化や都市化により，地域ぐるみ

で子育てを行う，という認識が弱くなり，家庭単位で子育てを行うことが一般的になってきたことで周囲にサポートを求めることが難しくなっていることや夫の長時間労働や母親自身の就業環境が子育てと仕事を両立するには不十分であり子育て以外の自分時間の確保の難しさから生じることが考えられる。育児不安や育児困難感についても少子化や核家族化，都市化の進行により，自分が妊娠出産するまで子育てに関わる機会がなく，初めて子育てに触れることから自分が思い描いていた子育てとのギャップや未知の経験から生じることが考えられる。また，孤立感の要因である「みんなと同じように子育てをしなくてはいけない」「他の親の方がきちんと子育てができている」といった規範意識や自信のなさは，情報がすぐに手に入れられ，他人との比較が容易にできる現代だからこそ生じるのではないだろうか。これらを考えると現代の子育てには現代特有の難しさがある。特に子育ての中心的な役割を担う母親の育児への否定的感情を少しでも和らげるには，子どもを育てるためにやるべきことを少しでも軽減してくれる存在や母親の抱える苦労や頑張りを受け止めてくれる存在が重要であり，ソーシャル・サポートは必須であると考えられる。

2.　誰からのどのようなソーシャル・サポートが重要であるか

子育て中の母親へのソーシャル・サポートは，母親にとって身近な夫や実父母に求められることが多い一方，サポートの種類によっては，子育てや医療における専門的な領域からサポートを求めることもある。また，効果的なサポートのためには個々の母親の特性に合わせて適度な距離感で適量のサポートを行うことが重要であると考えられる。特に情緒的サポートについては，先行研究においてサポートの中でも重要なサポートとして挙げられている一方で，サポート時の文脈によってはネガティブな側面を持つこともあるため，今後も検討を重ねることが求められる。また，母親がソーシャル・サポートを求める存在について，海外と比較して，相談機関や専門家へサポートを求めるよりも実母を頼る傾向が高いことは日本特有であることが示唆された。習わしとして古くから現代まで続く里帰りという慣習も相まって，実母に頼ることや母娘の関係性には日本独特の考えがあるのかもしれない。このことから今後の研究では，夫だけではなく，実母からの情緒的サポートについてもその影響や意義を検討していく必要があると考えられる。

3.　今後の展望

最後に，夫や実母からの情緒的サポートについて焦点を当てた際の今後の展望について二点挙げる。

第一に挙げられるのは，ソーシャル・サポートの中でも最も重要であると考えられている情緒的サポートについて，サポートの際に用いられる言葉かけに焦点を当てて母親の内的体験を明らかにすることである。情緒的サポートは，「母や子どもに興味を示す，気持ちを楽にする」（髙橋，1999）ことや「共感，関心，信頼」（山田他，2005），「労うこと」（鈴木・古株，2015）といったものが挙げられているが，サポートする側のどのような言動が子育て中の母親にとって精神的に支えられていると感じられるのかはどの先行研究でも明確には述べられていない。その中でも情緒的サポートの際に用いられる言葉かけについて，子育て中の母親が夫や実母からどのような言葉をかけられ，その言葉が子育てや母親自身にどのような作用をもたらすのか具体的に検討した文献はほとんど見つからなかった。

情緒的な言葉かけは，多くの母親が家族を相談先とすることから，言葉でのやりとりが多く，母親の精神面に寄り添う手段として行いやすいサポートである。しかし一方で，母親の特性や言葉が発せられた文脈によってはポジティブな効果だけ

をもたらすものではないことが考えられるため，情緒的サポートの一つであると考えられる子育て中の母親への言葉かけについて母親の内的体験を考究することは母親への養育支援においても意義のあることだといえる。

第二に挙げるのは，情緒的サポートの積み重ねが夫婦関係や母娘関係にどのような影響を与え，どのように「家族」となっていくのか，そのプロセスを検討することである。先行研究では岡他（2019）は母親に対する夫からの情緒的サポートが「夫が一番の理解者」「夫とならばこの先も頑張れる」といった想いに繋がっていたことを報告したことから，家族の情緒的な言葉かけにより子育て中の母親は家族への新たな想いが生じ，家族との関係性が変化する可能性が考えられる。このことから，情緒的な言葉がけを受けた母親の反応や行動から夫・実母にはどのような変化があったのか，そして家族は子どもや子育てを通じてどのように関係性が変化していったのか，「家族」の変遷を辿っていくことが求められる。

以上のことから夫や実母から言葉かけを受けた子育て中の母親がどのような心理的プロセスを経て，どのように反応するか，また，情緒的な言葉かけの積み重ねは家族にどのような変化をもたらすかを明らかにすることが今後の課題であるといえる。これらを検討することは夫や実母といったサポートする側のサポートをしたいという気持ちと子育て中の母親のサポートのニーズについて，その認識の齟齬を減らすことの一助となり，母親を含めた子育てをする人たちにとって，より良い子育て環境が整うことにも繋がるであろう。

文献

荒木 美幸・大石 和代・岩木 宏子・渡辺 鈴子・池田 早苗・達田 志津子・小川 由美子 (2001). 育児期にある母親に対するソーシャルサポートと育児ストレスとの関連性 長崎大学医療技術短期大学部紀要 *14*(1), 89-95.

荒牧 美佐子・無藤 隆 (2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い: 未就学児を持つ母親を対象に 発達心理学研究, *19*(2), 87-97. https://doi.org/10.11201/jjdp.19.87

寶川 雅子 (2015). 早期虐待予防を目的とした子育て支援プログラムについて–親子の絆づくりプログラム "赤ちゃんがきた!" の実施からわかる参加者への効果 鎌倉女子大学紀要, (22), 51-59. https://doi.org/10.18990/00000399

House, J. S., Kahn, R. L., McLeod, J. D., & Williams, D. (1985). Measures and concepts of social support. In S. Cohen & S. L. Syme (Eds.), *Social support and health* (pp. 83–108). Academic Press.

伊吹 麻里・中村 歩美・中野 真希・室谷 絵里子・河野 益美・柴田 真理子・足利 学・中野 博重 (2005). 核家族における乳幼児期の母親の育児不安: 育児不安に影響する人的環境要因 藍野学院紀要, *18*, 105-111.

井田 歩美 (2013). わが国における「母親の育児困難感」の概念分析: Rodgers の概念分析法を用いて ヒューマンケア研究学会誌, *4*(2), 23-30.

稲葉 昭英 (2007). ソーシャル・サポート, ケア, 社会関係資本 福祉社会学研究, *2007*(4), 61-76. https://doi.org/10.11466/jws2004.2007.4_61

稲葉 昭英・浦 光博・南 隆男 (1987). 「ソーシャル・サポート」 研究の現状と課題 哲學, *85*, 109-149.

岩渕 祥子・奥澤 聡子・神川 洋平・川崎 有亮・中西 恵美・贄 裕亮・稗田 太郎・津田 洋子・和田 敬仁・野見山 哲生 (2009). 母親の育児負担感への寄与因子の検討に関する研究 信州医学雑誌, *57*(5), 155-161. https://doi.org/10.11441/shinshumedj.57.155

河野 順子 (2011). 母親が抱える育児不安に関する要因: 子どもの育てにくさ, 母親の認知様式, 父親の育児参加をめぐって 東海学園大学研究紀要, *16*, 55-64.

菊島 勝也 (2003). ソーシャル・サポートのネガティヴな効果に関する研究 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, *6*, 239-245.

小林 由希子 (2010). 出産前後の里帰りにおける実母の援助と母子関係・母性性の発達 日本助産学会誌, *24*(1), 28-39. https://doi.org/10.3418/jjam.24.28

厚生労働省 (2018a). 子ども虐待による死亡事例等の検証について Retrieved August 31, 2023 from https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000198645.html

厚生労働省 (2018b). 妊産婦に対するメンタルヘルスケアのための保健・医療の連携体制に関する調査研究 Retrieved August 31, 2023 from https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000520478.pdf

厚生労働省 (2022). 令和 3 年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数 (速報値) Retrieved August 31, 2023 from https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000987725.pdf

厚生労働省 (2022). 2021 (令和 3) 年 国民生活基礎調査の概況 Retrieved August 31, 2023 from https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa21/dl/12.pdf

草野 恵美子・奥野 ゆかり・佐藤 文子・和木 明日香・浅見 恵梨子・上田 惠子・吉田 久美子 (2013). 乳幼児を育てる母親の「近所づきあいの程度」がその地域における「子育てのしやすさ感」に及ぼす影響 大阪医科大学看護研究雑誌= *Osaka Medical College journal of nursing research/大阪医科大学看護学部看護研究雑誌編集委員会 編*, *3*, 10-17.

文部科学省 (2000). 少子化と教育について (中央教育審議会報告) Retrieved August 31, 2023 from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/000401.htm

文部科学省 (2004). 第 4 節 子どもの育ちの現状と背景 Retrieved August 31, 2023 from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1395404.htm

森下 順子 (2019). 子育て支援に関わる保育者からのソーシャルサポートと，育児肯定感・育児負担感との関連 和歌山信愛女子短期大学信愛紀要, *60,* 25-29

内閣府 (2004). (2) 就業と家庭のバランス: 子ども・子育て本部 Retrieved August 31, 2023 from https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2004/html_h/html/g1223210.html

内閣府 (2006). 第 5 章 社会全体の意識改革: 子ども・子育て本部 Retrieved August 31, 2023 from https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2006/18webhonpen/html/i1511110.html

内閣府 (2007). 2 働き方をめぐる問題点: 子ども・子育て本部 Retrieved August 31, 2023 from https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2007/19webhonpen/html/i1312100.html

内閣府 (2018). 「第 1 子出産前後の女性の継続就業率」及び出産・育児と女性の就業状況について Retrieved August 31, 2023 from https://wwwa.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/k_45/pdf/s1.pdf

内閣府 (2022). 第 1 部 少子化対策の現状 (第 1 章 2) Retrieved August 31, 2023 from https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2022/r04webhonpen/html/b1_s1-1-2.html

内閣府男女共同参画局 (2020). 「共同参画」2020 年 9 月号 Retrieved August 31, 2023 from https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2020/202009/202009_02.html

野澤 義隆 (2012). 育児ストレス概念における下位構造の検討 立正社会福祉研究, *13*(2), 1-5.

太田 ひろみ (2014). 都市部での子育てをめぐる課題と大学が行う子育て支援活動 杏林医学会雑誌, *45*(3), 101-104. https://doi.org/10.11434/kyorinmed.45.101

榊 ひとみ (2010). 子育て家庭の孤立化の論理 *北海道大学大学院教育学研究院紀要*, *110*, 65-84. https://doi.org/10.14943/b.edu.110.65

笹川 拓也 (2014). 地域社会における子育て支援の現状と課題 ： 子育て支援制度の変遷と子育て家庭の現状について 川崎医療短期大学紀要, (34), 13-18.

佐藤 達哉・菅原 ますみ・戸田 まり・島 悟・北村 俊則 (1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究, *64*(6), 409-416. https://doi.org/10.4992/jjpsy.64.409

島田 葉子 (2019). 育児ストレスや育児不安, 育児困難を抱える母親への育児支援の実際とその効果についての文献検討 看護学研究紀要, *7*(1), 69-81.

鈴木 美佐・古株 ひろみ (2015). 4 歳から 6 歳の幼児をもつ母親の育児負担感と自己効力感, ソーシャルサポートの関連 聖泉看護学研究, *4*, 11-20. https://doi.org/10.34359/00001156

高橋 泉 (1999). 医療的ケアを要する乳幼児をもつ母親のソーシャルサポートに対する認識 日本小児看護学会誌, *8*(2), 31-37. https://doi.org/10.20625/jschn.8.2_31

武田 祐佳 (2019). 子育て期女性のサポート・ネットワークと精神的健康: ライフステージ間の比較 同志社社会学研究, *23*, 15-24.

竹口 和江・新田 祥子 (2019). 「産後の復職支援」 の概念分析 長崎県立大学学長裁量研究成果報告, 1-4.

遠山 景広 (2016). 大都市における子育て家族の社会的孤立要因: SSP2015 を用いた地域信頼度の分析より 研究論集, *16*, 209-230. https://doi.org/10.14943/rjgsl.16.l209

塚本 伸一 (2021). ソーシャル・サポートと母親の愛着スタイルが育児ストレスに与える影響 応用心理学研究, *46*(3), 247-256. https://doi.org/10.24651/oushinken.46.3_247

上野 恵子・穴田 和子・浅生 慶子・内藤 圭・竹中 真輝 (2010). 文献の動向から見た育児不安の時代的変遷 西南女学院大学紀要, *14*, 185-196.

UNICEF (2021). Where do rich countries stand on childcare? (pp. 10) Retrieved August 31, 2023 from https://www.unicef-irc.org/publications/pdf/where-do-rich-countries-stand-on-childcare.pdf

岡 未奈・佐々木 睦子・石上 悦子 (2019). パートナーからの情緒的サポートに対する産後 1 か月の初産婦の思い 香川大学看護学雑誌, *23*(1), 1-10. https://doi.org/10.34390/njku.23.1_1

渡辺 弥生・石井 睦子 (2005). 母親の育児不安に影響を及ぼす要因について 法政大学文学部紀要, *51,* 35-46. http://doi.org/10.15002/00004121

八重樫 牧子, 江草 安彦, 李 永喜, 小河 孝則・渡邊 貴子 (2003). 祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響 川崎医療福祉学会誌, *13*(2), 233-245.

山田 英津子・有吉 浩美・堀川 淳子・石原 逸子 (2005). 働く母親のソーシャル・サポート・ネットワークの実態 *Journal of UOEH*, *27*(1), 41-62. https://doi.org/10.7888/juoeh.27.41

山﨑 さやか・篠原 亮次・秋山 有佳・市川 香織・尾島 俊之・玉腰 浩司・松浦 賢長・山崎 嘉久・山縣 然太朗 (2018). 乳幼児を持つ母親の育児不安と日常の育児相談相手との関連: 健やか親子 21 最終評価の全国調査より 日本公衆衛生雑誌, *65*(7), 334-346. https://doi.org/10.11236/jph.65.7_334

吉永 茂美 (2007). 母親が期待するソーシャル・サポートの実態と育児ストレッサー, ストレス反応との関係－1～6 歳児をもつ母親を対象に－ 小児保健研究, *66(5),* 675-681.